松林詔八さんを偲ぶ

松林詔八君のお通夜にお参り下さいました皆様に、葬儀委員長としてご遺族に代わりまして御礼のご挨拶をさせていただきます。

今夕は、何かとご多用のところ、松林君のためにご焼香下さり、かつ又、心からなるご供花、ご供物、ご香料など賜りまして誠にありがとうございました。

松林君は、私にとってかけがいのない生涯の友であり、四十年にわたって公私共に言葉にいい尽せぬ程のご厚情をいただいて参りました。

このたび、奥様のスミ子様が松林君の書き残した遺言の中で「葬儀委員長は横路に」と記されてあったとお話くださいました。病床にあってもいつも明るく冗談を言いあっていましたので、彼がいつ、どんな思いでそんなことを決定したのかと胸つぶれる気持ちがいたします。お世話になることばかり多かった私にとって、それが松林の希望ならばとお引き受け致しました次第です。

お参りいただいた皆様はご承知と思いますが、十一年前の一九九四年五月に癌の手術を受けました。食道と胃をとる大手術でしたが、元気に復帰致しました。その後三年たって九七年の八月、再び大腸癌の手術を受け、これも元気で社会に復帰、もう問題ない皆が考えていたのですが、七年後の昨年一一月喉頭癌を発症、入院して抗がん剤などの治療を受けて一月に退院いたしました。私はこのよう

に何度も不死鳥の如くよみ返ってきた松林のことだから、今度も大丈夫と祈りを込めて見守っておりました。

なくなる一週間前にお見舞いをした時には、痰を処理するために喉に穴をあけていたので筆談をかわしました。顔色もよく、本人も三日もしたらこの穴を閉じて話ができるというので、当然また会って話ができると思って握手をして病室を出ました。それが、私と松林との最後になりました。

その後五日程安定した日が続き、喉もふさいで声も出るようになった矢先、突然、多量の吐血、痛みもひどくなり、輸血や鎮静剤の投与、医師団も懸命な努力をして下さいました。奥様、お兄様達、甥御さん、姪御さん達皆様の囲まれて、六月二十四日午後十一時二十分ついに黄泉の国へ旅立ちました。誠に誠に痛恨の極みであります。

特にこの間、十一年以上にわたる彼の闘病を支えられた奥様スミ子様のご苦労と献身、松林君を慈しんでこられたお兄・姉の皆さまに衷心よりお悔やみ申し上げます。

ここで慣例により松林詔八君の経歴を簡単ではありますがご紹介させていただきます。

松林詔八君は、昭和十七年一月八日父・松林幸次郎さん、母カノイさんの十一人兄弟の末っ子として長野で生まれました。ご両親、七人のお姉さん達、三人の

お兄さん達の愛情を一身に受けて育ちました。昭和三十五年三月長野高等学校、昭和三十九年三月中央大学法学部法律学科を卒業され、四十年十月司法試験に合格されました。二年間の司法修習を経て、昭和四十三年四月東京弁護士会で弁護士登録、風間克貫法律事務所で仕事を始めた。昭和四十八年、一九七三年に独立、赤坂に事務所を構え、昭和五十年今の三宅坂ビルに移り、現在に至っています。法律家としては民事・刑事を問わず幅広いジャングルで辣腕をふるって来ました。ある雑誌の紹介に「僕はお堅い人間だからと口ではおっしゃるが、どうしてどうして、その新鮮にして、柔軟な発想は定評があるところ。最新の小説は欠かさず読破、三六五日欠かさず飲み、週末には麻雀の誘いあらば馳せ参じ、出身地の戸隠で同窓会あらば飛んでいき、本当は法廷をサボって遊び暮らしたと公言するも仕事にはいたって誠実。ダンデイズムの人なのだ」と書かれたことがあります。まさにその言葉通り、ゴルフの腕前も超一流、そして人々への気配りも超一級、会談では人々を笑わせ、キャデイさん達の人気者でもありました。

私との個人的な関係の始まりは、四十年前の司法修習の時でありました。彼は私より一年早く司法試験に合格していましたが、口述試験で試験官と口論になり一年遅れで、私と同じ二十期になりました。クラスは隣りのクラスでしたが、東京修習で一緒になり、麻雀を教わったり、研修所で出される宿題を何人かで考えあう仲間となりました。研修所二年目の夏、松林と一緒に長野の善光寺に行き、

その年の六月亡くなって私の父のために、仏壇のリンを買いました。このたび、松林の訃報を聞いたのが、札幌に帰った夜中でした。仏壇でそのリンを鳴らすと涙が止まりませんでした。

松林は、私が弁護士活動二年目で政治の世界に踏み込むことになった時「俺も政治の仕事はやりたいが、お前がいるからお前に任す。俺は応援側にまわるから、しっかりやれ」と励ましてくれました。以後ずっとその言葉のとおり三十五年間、私の東京後援会の幹事長として、当時の後援会会長一枚の會故竹田厳道さん、今のヒノキ新薬の阿部武彦さんと一緒に頑張ってくれました。特に三回にわたる北海道知事選挙では、仕事をなげうって札幌まで何度もスミ子夫人共々駆けつけてくれました。

私には、松林君ともう一人中学時代からの生涯の友といえる池田君がいますが、これまで政治活動でいろいろなことがあり困難にもたびたびぶつかり、辛いこともありましたが、そのたびに三人で、飯を一緒に食べたりゴルフや麻雀をして「ワカッタ、ワカッタ」と励ましてくれたこと、どんなに私自身が慰められ、力を貰って活動を続けられてこられたことか、感謝の言葉もみつからない程です。

この十一年にわたる癌との闘い、壮烈な闘いの中でよくもあれだけ頑張れたなあ、そして人への優しさ、思いやりを見せてこられたなあと、驚き尊敬の念に

かられます。そして、そのいい時も悪い時もそばにあって、スミ子夫人がどんなに気苦労されてきたことか、松林の苦しみと子供のような部分を、奥様が広い愛情で受け止めてくれなければ、十一年もの間、病気と闘うことはできなかったと思います。

松林君、そしてスミ子夫人、本当に本当に有難う。松林のかけてくれた大きな期待と希望、その思いを忘れることなく、私は、私達はこれからも歩んでいかなければと心に誓っています。

葬儀委員長の挨拶としては、個人的な感情にすぎたものとなり、誠に申し訳ございません。

ご遺族にとりまして、そして、私を含め本日お参りくださった皆さまにとりましても、大きな大きな存在であった松林詔八君のご遺徳をしのび、心よりこれまでの深いご厚情に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

本日はご多用のところ、また、暑さ厳しい折、お参りいただき誠にありがとうございました。